



キリシタンの 神を祀る天守閣



はじめに

近年、各地の天守閣を木造で再建しようという動きが高まっています。明暦3年（1657）に「明暦の大火」で焼失した江戸城天守閣についても、NPO法人江戸城天守を再建する会によって働きかけられており、特別顧問である広島大学大学院教授の三浦正幸氏は、その意義を次のように述べています。

「日本の首都東京には、現代建築技術を誇示する東京スカイツリーはあっても、歴史的な象徴は全くない。（…）首都東京の象徴に相応しい歴史的建築は、江戸城天守を置いて外にない。（…）この天下一の超巨大天守を往時と同じ木造で再現できれば、崇高で広範な日本文化の本質と伝統木造技術の精華を広く世界の人々に知ってもらえるのである」

確かに天守閣は日本独自の文化であり、城郭と地域の象徴であり、木造建築技術の粋であり、ひいては日

天守閣はいらない

例えば少し時代が降りますが、江戸の薬種商の山崎美成の随筆『海録』（1820-1837年）には、太田錦城と似たような天主論を披露したうえで「要害にはならぬもの也、却りて害はあるべしとおもはる」と述べています。

また、国学者の西田直養が1840年代前半に記した『笹舎漫筆』にも「城になくてよき物が天守なり。されば江戸にも再造なく、大坂にも、二条にも、ふたたびつくられざることをべなりけり」とあり、キリスト教が起源の天守閣など無用だからいらないと排斥しており、現代の天守閣木造再建運動とは真逆の意見が展開されています。



江戸城の天守台(東京都千代田区)

本を代表する歴史的建築物と言えるのかもしれませんが。しかし、実は江戸後期から明治前期までは、天守閣はキリシタンの神を祀る建物だと考えられていたのです。法隆寺や桂離宮、伊勢神宮などで興味深い論考を展開した国際日本文化研究センター教授の井上章一氏の『南蛮幻想』をもにご紹介します。

天主と呼ばれた天守閣

そもそも天守閣は、織田信長が天正4年（1576）に着工し、同7年に完成した安土城がはじまりとされています。ただし、後で述べますが、それ以前にも天守閣があったことをほのめかす記録もありますので、安土城は本格的な高層の天守閣のはじまりと位置づけられています。さて、その当時の天守閣は、「天主」と呼ばれていました。そしてまた、

禁教令の結果…

そもそも、キリシタンは江戸の最初期である慶長17年（1612）に出された禁教令によって、社会の表面から一掃されていきました。そうして、人々はキリシタンとは、どういうものなのかわからなくなっていました。

そして何か不可解なもの、反幕府的なものをキリシタンと見なすようになりました。訳のわからないものに対して「キリシタン・伴天連の魔術か!」とわめく時代劇のセリフそのままの世界だったので。井上氏は、江戸後期の天主教起源説が生まれた背景について、次のように締めくくっています。

「18世紀後半には、西洋に関する知識が、知識人のあいだへひろまります。西方からの文化伝播が、日本にとどいていたという話も、受容されやすくなってきた。

得体の知れないものに、キリシタンのレットルをはりつける。そんな感受性をもっていたひとびとが、文明東漸の歴史があった可能性を、学習した。そのため、過去の歴史をも、その文脈で考えやすくなっていく。日本文化史のなかにも、得体の知れないキリシタンのものを、さがそうというように。

18世紀の末から、そんな好奇心のわきやすい時代がはじまったと評せよう。とりわけ、天守閣のような無

キリスト教の神も同じく「天主」と呼ばれていたのです。信長がキリスト教に理解をせしめ、安土城下には神学校などキリスト教の施設が建てられていたのは周知のことです。この両者には何らかのつながりがあるのではないかと、人々は考え始めました。



安土城天主 東～西断面 20分の1の1ひな形 (安土城郭資料館復元模型・内藤 昌 復元©)

江戸後期の天主教起源説

天守閣がキリスト教と関連があると語られたのは、18世紀末からだと井上氏は考えています。例えば、江戸後期の儒者として知られる太田錦城の『梧窓漫筆拾遺』には次のように記されています。

正体がわかりづらい施設

実際、江戸の人々にとっては、天守閣はキリシタン同様に「正体がわかりづらい施設」でした。なぜなら、冒頭でも述べたように江戸初期の「明暦の大火」で焼失したのち、再建されることはなかったからです。被災後、江戸城天守再建が議論された際に、幕政に重きをなした保科正之が、天守は織田信長公以来のことで、さほど城の要害として役立つこともなく、遠くを見るための展望台に過ぎない、といった趣旨を述べたことは有名であり、事実再建されることはありませんでした。

天守閣とは城主の威厳を見せつけるための建築であり、太平の世において実利的な用途は物置と展望台に過ぎませんでした。將軍の居城にもない天守閣を他藩の城ではなぜ持っているのか。キリシタンの神を祀っているのではないのかと、江戸後期の人々が怪しんだのは、ごく自然の成り行きだったのかもしれない。

天主教起源説の否定

さて、このような天守閣の天主教起源説ですが、明治23年（1890）に歴史家の田中義成の発表した「天

うに書かれています。

「西洋人は、家宅を五重七重に作りて、其第一の高層の処に、天主を祭る。信長公天主の邪教を偽りて、仏法を破却する志あり（…）安土に大櫓を立てられて、天主と称す。是天下天主の始なり（…）実は其第一の上層に、天主を奉祀する故に、名付けたるにて、西洋人の真似をしたるなり」

信長はキリスト教の力をかりて、仏教を滅ぼそうとしている。そのため大櫓を建てて天主を祀ったと記されています。そしてさらに「信長公の心得違より出でたることにて、天守は天主なりと云ふことは知るべき理なり。今かく御制禁に、官名までも、其称呼を用ふることは然るべからざること歟と覚ゆ。天下一統に、天守と云ふ語を禁じて、大櫓と云ふべき事なり」

まったく信長の心得違いが生んだものなので、天守などと呼ぶのは禁守閣考」によって否定されます。田中はキリスト教の神が「天主」と訳出される前に、安土城の「天主」はすでに完成していたことを指摘しました。

実際、日本におけるキリスト教の「天主」の最も早い用例は、宣教師ヴァリニャーノが天正9年（1581）に刊行した教理問答『日本のカテキズモ』に見られますが、それより前の同7年に安土城は完成しています。

おわりに

この天主教起源説のほかに、仏教起源説などさまざまな説があります。が、決着はついていません。しかし、信長を語るに最も重要な資料『信長公記』から安土城天主についての記録を見ると、物置となった後世の天守閣とは違い、信長は安土城の天守閣を住居としていましたので、各層の室内は絵画で彩られていました。その画題は儒教・仏教・道教から取材したもので、キリスト教の人の余地はなかったようです。どうやら、これ一つを見ても天主教起源説は、いまのところ旗色が悪いように思えます。

(文：江口知秀)